

# 現在の実現に関わる時の副詞

— 「ついに」・「とうとう」を中心に—

金英児\*

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 「ついに」・「とうとう」の辞書的意味
  3. 「ついに」・「とうとう」の共通点
    3. 1. 現在の事態の実現
    3. 2. 確実的な未来
    3. 3. 非実現
  4. 「ついに」・「とうとう」の相違点
    4. 1. 文章語的と口頭語的
    4. 2. 期待性と反期待性
    4. 3. 最終到達性と漸次的な過程性
    4. 4. 新しい局面への展開
  5. まとめ
- 

## 1. はじめに

完了のAspectに関わる副詞「ついに」・「とうとう」は、川端(1964)によると、「ある事態の終結によって与えられた象面に現在が置かれるもの」で、「その事態の

---

\* 京都女子大学大学院文学研究科博士後期課程・特別研究者、日本語学

終結が、現在より以前であることを表すもののうち、現在と事態の終結としての以前との間の時間量的な隔たりが零になった関係を表す」時の副詞の中にあつて、「現在のある事態の成立の速度が小である」ことを表すとされている<sup>1)</sup>。その同じグループには「やっと・ようやく」も属している。また、仁田(2002)では、「事態への取り掛かりまでの時間量、事態が発生・実現するまでの所要時間量に関わるもの」として起動への時間量を表す副詞を分類整理し、「やっと」・「ようやく」・「ついに」・「とうとう」は<長期所要型>に属し、モーダル的な意味合いが表されていると説明している<sup>2)</sup>。

これらの各語について、「やっと」・「ようやく」と「ついに」・「とうとう」の間の比較研究は日本語教育誤用研究会(1997)、田・泉原・金(1998)、李(2000)<sup>3)</sup>などにされているが、各語の個別的な比較検討も必要であろう。これらのうち、私は「やっと」と「ようやく」について、歴史的な背景をもふまえて意味の特質を押さえ、現代の用法を実例に則して考察した(金2006. b)。続いて本稿では「ついに」と「とうとう」について検討する。さらに「やっと」・「ようやく」を加えて比較することによって、近接類似するこれらの各副詞の特質を、モーダル的な意味を含めて明らかにしていきたいと考えている。

## 2. 「ついに」・「とうとう」の辞書的意味

「ついに」・「とうとう」について、現代語を対象としたいくつかの辞書を参照すると次のようである。

- 1) 金(2006a)を参照。
- 2) 仁田(2002)では、「事態への取り掛かりまでの時間量、事態が発生・実現するまでの所要時間量に関わるもの」を大きく、[1]「すぐ」「突然」などのように、<僅少所要型>をあらわすもの、[2]「程なく」「おっつけ」のように、<中期所要型>を表すもの、[3]「ようやく」「やっと」のように、<長期所要型>を表すものに分けている。その中で<長期所要型>に「ようやく、やっと、とうとう、ついに、……」などのようなものが属する。(p.246)
- 3) 李建華(2000)では、「ついに」・「とうとう」・「やっと」・「ようやく」の意味や使い方の違いを辞書の用例を利用してアンケート調査を行い、互いに置き換え可能か不可能かを検討した。結論として、「ついに」・「とうとう」に関しては、「置き換え不可能な場合がないと言ってもいいぐらい、実によく似ている言葉である」(p.131)とし、意味・用法がほとんど同じであると捉えて詳細な考察はされていない。従って、本稿では類似する二語の意味・用法の共通点・相違点を詳しく考察する。

【ついに】

『岩波国語辞典』①長いいきさつ・時間の後に。とうとう。②《あとに打消の言い方を伴って》最終まで(一度も)。 (p.787)

『集英社国語辞典』①最終段階で。とうとう。②(下に打消の語を伴って)最終段階に至っても。最後まで。一度も。とうとう。 (p.1147)

『明鏡国語辞典』長い時間やさまざまな経過を経て、ある結果に達するさま。とうとう。 (p.1070)

【とうとう】

『岩波国語辞典』いろいろの事があった挙句に。最後まで。ついに。 (p.848)

『集英社国語辞典』《口頭》最終の結果となるさま。ついに。結局。果ては。 (p.1236)

『明鏡国語辞典』いろいろな過程を経て、ある結果に達するさま。ついに。結局。最終的に。 (p.1157)

【ついに/とうとう】

『基礎日本語辞典』—「とうとう」の項

「とうとう」も「ついに」と近い意味を持ち、ほとんどすべての例が『とうとう』と言い換えられる。用法上の違いはないが、意味的には多少の違いが認められる。 (p.718)

『類義語例解辞典—使い方のわかる—』—「ついに/とうとう」の項

共通する意味—長い時間を要して、あるいはさまざまな事があった後に、ある最終的な結果が現れるさまを表す語。

使い分け [1] 「ついに」は当初の期待がかなったり、不安が現実化したりする場合に用いられる。 [2] 「とうとう」は、前の段階、程度が高まったり進行したりした結果や成り行きを表す。 [3] 「ついに」と「とうとう」では、「ついに」の方が、やや改まった言い方。 (pp.688~690)

上記5種の辞書では、いずれも「ついに」の説明に「とうとう」が用いられ、また、「とうとう」の説明に「ついに」が挙げられているように、ほぼ相互交替可能で、この2語の、用法上、また意味的な近似が窺える。これらの記述を整理すると次のようである。

【1】この2語が核とする意味は、最終的にある結果に達するさまを表す、と言える。そ

の実現の際に、長い時間を要したり、さまざまな過程を経て最終段階に達するさまをも表す。

【2】「ついに」に関しては、打消の語を伴う表現がある。

【3】「とうとう」に関しては、口頭語的である。

以上のような整理に従いながら、まず、「ついに」・「とうとう」の共通点から検証し、続いて差異について考察していく。

### 3. 「ついに」・「とうとう」の共通点

#### 3. 1. 現在の事態の実現

「ついに」・「とうとう」は、現在のある事態が、長い時間や労力、エネルギーなどが費やされて実現したことを表す。たとえば、次のようである。以下、それぞれについて実際の用例をあげて考察していく。

(1) …息が上がりそうになる。前と後ろの人の波に、引っぱられ、後押しされるような思いで、やっと山頂にたどり着いた。待つこと10分。雲の透き間に金色とオレンジを混ぜたような光が見え、徐々に半円を描いて、ついに丸い初日が昇った。

(2004.1.10.朝刊)

(2) 悟朗は相当酔っていたが、淳蔵の忠告も聞かず飲み続け、ついに正体なく眠りこけてしまった。(藤田宜永『愛の領分』)

(3) 「…自慢の出来るのは碓氷峠と逢坂山だ。今の逢坂山はあれは誰がして失敗したもんだが、とうとう最後にわしが仕上げた。…」(トンネル技師の父の回想)

(横光利一『旅愁(下)』)

(4) 順調に受験の2日間を過ごし、後は結果を待つばかり。とうとう「合格」の通知が来た。(2003.2.27.朝刊)

このように、「ついに」・「とうとう」は、さまざまな経過の後に「最後」の「結

果」として発話時現在のある事態が実現・終結したことを表している。

(5) たばことライターと灰皿を、2階の自分の部屋に持って行った。…吸いたい時は2階に行かざるを得ない。最初の頃は、2階に行って吸っていたが、そうこうするうちに面倒になり、回数が減ってきた。1カ月くらいすると、1箱が1週間ももつようになった。さらにだんだん本数が減っていき、ついに禁煙に成功した。3カ月かかった。

(2005.2.15.朝刊)

(6) …負けても負けても私は球場へ足を運んだ。たまに勝つとうれしくて帰りの西鉄電車内で気分がよかったことはいまでも忘れられない。時間がかかったが、ホークスはとうとう日本一になった。

(2005.10.5.朝刊)

これらは、(5)「3カ月かかった」、(6)「時間がかかった」という表現から知られるように、両方とも長い時間を要して結果に至ったことを表している。

(7) 04年9月21日午前6時半、登り始めた。北岳の数百メートルにわたる岩場の急斜面は息が上がった。だが、トレーニングのおかげで回復が早い。2人の間に挟まれてゆっくり登り進み、ついに山頂にたどり着いた。

(2004.12.19.朝刊)

(8) …昨年8月7日(土)の夏休みスペシャルbeパズル「漢字抜け熟語」が、やっと完成した。…それから8カ月余り。もうやめようと何度思ったことか。しかし、ほけ防止のため最後までやり抜こうと自分を励まし、いろいろな本を読んで、ついに空欄をすべて埋めた。

(2005.5.18.朝刊)

(9) 竹とんぼ、とうとう飛んだ(街かど)／宮城

…この日、ふだんはあきらめが早い拓海君が、家に帰ってからも竹とんぼに挑戦した。不自由な左手を固定し、右手を前にこすり出す瞬間に一気に飛ばす。何度目だったか、ふわっと竹とんぼが浮いた。「飛んださー」。由美さんが声を上げた。

(2004.11.27.朝刊)

(10) 初めは馬の背に乗せられていだけの受け身的な子どもたち。馬が進まなければ、すぐに助けを求める。…「お前たちは何をしたいのか？」と草原が問いかけていた。子どもたちは首をかしげ、戸惑いながらも次第に意思をテムジンに伝えようと努め始めた。そして最後の日の夕暮れに、とうとう走らせることに成功した。感動のあまり写真を撮り忘れた。

(2004.8.25朝刊)

(8)では「8ヵ月余り」、(10)では「そして最後の日の夕暮れに」と、所要時間の長さが記されているが、そのことよりも、(8)何度も挫折しそうになりながら、あきらめないで自分を励まし、いろいろな本を読むという努力を重ねた結果としてパズルを完成させたことに重点がある。(10)でも、初めは受け身的であった子どもたちが、当惑しながら次第に能動的になり、努力を重ねて成功していく。(9)も、家に帰ってから挑戦しつづけた努力の結果の実現であることを表している。(7)も、「ゆっくり登り進み」によって所要時間の長さを示すとともに、慎重に困難な状況に対処しながら、頑張っていることが窺える。このように、(7)、(8)の「ついに」、(9)、(10)の「とうとう」は、所要時間の長さだけではなく、努力、労力、エネルギーなどを費やした結果として目標が実現したことを表している。「ついに」・「とうとう」のこうした意味について、仁田(2002)では、次のように説明している。

<長期所要型>とは、事態が長期の時間的経過を経て、起動し実現したと捉えられている。このタイプは、事態の起動・実現までの所要時間が長期に分かっている、ということを表すだけでなく、それ以上に事態の起動・実現に至るまでの経過に多大の労力・エネルギーが費やされたという、事態実現までへの心理的な長さ・遙かさとでも言えばよいような、モーダル的な意味合いが表されている。必ずしも物理的な時間の長さが一致するわけではない。(p.253)

- (11) 出国する大勢の観光客の真ん中で二人は抱き合い長いキスを交わした。豊は自分が壊れてしまうのではないかと思うほどの悲しみの中にいた。杏子がついに堪えきれず泣いているのが分かった。(辻仁成『サヨナライツカ』)
- (12) …一瞬息を呑んだ春人が急に大声で笑いだした。ひとしきり笑い、とうとうたまらず、車を道の脇に停め、涙を拭うほど笑っている。(さだまさし『精霊流し』)

これらは、泣き出したり、涙を拭うほど笑い出すという事態実現の前段階に、(11)「ついに堪えきれず」、(12)「とうとうたまらず」というように、精一杯、感情を抑制していた経過がある。このような我慢や忍耐も、前述の努力・エネルギーを費やすことのバリエーションと考えられる。

- (13) サーチ&サーチ社は、チャールズのコピーライターとしての天分とモーリスの経営者としての才覚の組み合わせによって、驚くべき成長をとげます。一方で次々と斬新な

広告を打ち出し、他方で次々と関連会社を買収し、八〇年代の半ばには、ついに世界最大の広告会社にまでなっています。(2003.5.6.夕刊)

- (1 4) この夏に、とうとう庭の樺(けやき)の木を切りました。長いあいだ迷っていて、今年こそ、と話しあいながらやはり切れず、次の春の芽吹きを迎えるということを繰り返していました。ときどき、雀がびっしり止まって鳴いていたりして、このあと田んぼへ出かけて稲をつつのかしらんと心配したり、また、今年はとくに虫がひどく、蜂の巣まであって、庭に出られなくなったため、とうとう思い切ったのです。(2005.10.18.朝刊)

(1 3)では、長い所要時間とその間の経営努力を読み取ることは容易だが、前掲の例とは異なって、むしろ淡々と種々の経過が語られている。(1 4)でも、「樺の木を切る」という最終段階までにさまざまな経緯があったことをいうことに重点がある。以上のように「ついに」・「とうとう」は、現在のある事態が、長い時間を要したり、労力やエネルギーが費やされたり、さまざまな過程を経た結果として実現したことを表す。

さて、このような意味・用法を持つ「ついに」・「とうとう」ですが、日本語教育誤用例研究会(1997)では、相手の行為に「やっと」・「ようやく」と「ついに」・「とうとう」が使われた場合を比較して次のような例を挙げて説明している<sup>4)</sup>。(用例番号は金)

(1 5)「先生、あの本を{△やっと/△ようやく}完成なさったそうですね。

(1 6)A：先生、あの本を{○ついに/○とうとう}完成なさったそうですね。

B：ええ、{○やっと/○ようやく}書き上げたんです。

「『やっと』は、話し手の安堵感の裏に、『時間がかかりすぎた』という批判的評価が感じられるために失礼な感じを与えるのであるが、『ようやく』は、実現に向けての困難さ故に『主体の能力を低く見積もった』ことを示唆するから失礼になるのである。いずれにせよ、こうした場面では(1 6)のような会話が自然であろうし、敬意を表すべき相手の行為には『やっと』『ようやく』を用いない方がいい」(pp. 31～32)すなわち、敬意を表すべき相手の行為には「ついに」「とうとう」を用いるのが自然だと説明されているが、私の周囲の日本語学・日本文学を専攻している研究者の意見では、(1 5)と同様に、(1 6)Aにも違和感がある、とのことであった。今まで見てきたように、長い経過や苦労を伴って最終的な

4) 金(2006 b)参照

実現に到ることを示す「ついに」・「とうとう」の性質からして、やはり、敬意を表すべき相手に対しては使いにくいということが考えられる。敬意を表すべき相手でも、たとえば、苦労を共有した相手になら、「{ついに/とうとう}完成しましたね」、「{ついに/とうとう}やりましたね」の表現が可能であろう。一緒に苦労をした仲間でなく、また、特別な条件で共感できるような間柄でなければ、「やっと」・「ようやく」と同様に、「ついに」・「とうとう」も失礼な言い方になる。

### 3. 2. 確実な未来

田・泉原・金(1998)では、次のような例を挙げて、「確実な前提と確実な可能性があれば、『やっと・ようやく』は使えるが、『ついに・とうとう』には未来表現はない」(p.689)と説明されている。

- ・ 今度の試験、全部パスすれば、{xついに/xとうとう}卒業できる。
- ・ 夜間アルバイトをしたら、{xついに/xとうとう}食べていけるようになる。

しかし、「ついに」・「とうとう」にも次のような未来表現の例が見られる。

- (17) 故郷・三宅島への第1陣が2日に無事着いたとニュースで知り、10日に後を追う私たちは、ついに帰島できるのかと喜んでいる。(2005.2.6.朝刊)
- (18) 小さい時からの願いがとうとうかなう。祖国へ帰って肉親に会える。85年から中国公安局に手紙を書き、肉親捜しや帰国を要求した。99年に日本政府から資料が送られてきて、やっと今年孤児認定を受けることができた。(2004.2.24.朝刊)

「-だろう」の推量表現は伴わないが、確実性のある未来の事態の実現について「ついに」・「とうとう」が用いられる。田・泉原・金(1998)の挙げる例でも、何年も留年している学生が、「今度の試験にパスすれば{ついに/とうとう}卒業できる(だろう)」と言うことは可能である。この例は、また、「今度の試験にパスすれば{ついに/とうとう}卒業できるはずだ」とも言える。

- (19) 5月の初めに82歳になる母が、10歳年上の父を残して亡くなった。…だが、

どうにもならないのは残された父のことである。高齢者故に体調不良で病院に通うのは日課になっている。腰が痛い、歯が痛いと言う度に一緒に通院しなければならぬ。とうとう私は職を辞さねばならなくなった。(2005.6.11朝刊)

(19)は、その事態はまだ完了していないが、このように「-ねばならない/-なければならぬ」という当為表現を伴って、未来の辞職が確実である。これは、未来の事態実現が確実な、現在の事態の発生と説明できるが、このような条件のもとで、「ついに」・「とうとう」も未来表現を持ち得るのである。

また、「とうとう」は、いくらかかれた場面では、例えば、「とうとう米国にいくんですね」、「とうとう明日から毎日メッセージが変わっていくんですね!」など(インターネット上)のような例が多く見られるが、これらは、すでに決まっている事態の背景・事情・意味を話し手が認識・確認する「のだ」の表現を伴って、確実な前提・可能性があるものとして、未来を表している。

### 3. 3. 非実現

辞書の整理【2】で示したとおり、辞書類では、「ついに」は「下に打消を伴う」表現を持つと説明されていたが、「とうとう」にも次のような例があって、「ついに」・「とうとう」いずれも、打消を伴う表現を持つ。

(20) 太陽が西の空に沈む頃、その方向をじっと見つめお互い沈痛な雰囲気漂う。その朝飛び立った特攻機は、ついに1機も帰還してこなかった。(2003.5.28.朝刊)

(21) ついに、届かなかった。16日に4-4のまま15回延長引き分けとなり、迎えた再試合。高崎工に先行を許した。追いつがる太田は、1点差に迫りながら、とうとう同点の本塁を踏むことはできなかった。計24回、5時間34分の熱闘が終わった。(2005.7.19.朝刊)

(22) ようやく俳句総合誌12月号佳作に掲載された私の句。生きているうちに新聞俳誌に載った句を見せろと口癖だった父も、95歳でこの夏旅立った。とうとう間に合わなかった。(2003.12.27.朝刊)

このように、「ついに」・「とうとう」は、いずれも下に打消を伴って、最終的にある事態が実現しない、非実現を表すことがある。

(23) 「力づくなら誰にも負けねえけれど、昨晚の泥棒みたようなすばしっこい奴には敵わねえ、幽霊みたようだ、そこにいたかと思うとスーッと消えてしまっただ、あんな泥棒はつかめえどころがねえでがすから力づくにやいかねえ、それでとうとう取逃がしてしまった」

与八、少々残念らしく見えます。 (中里介山『大菩薩峠1』)

(23)では、打消を伴わないが、「昨晚の泥棒を取逃がした」というのは、「捕まえられなかった」と等しい表現性のもので、内容的には否定表現といえる。このようなものも非実現と認められる。

森田(1994)では、「ついに」について、「たとえ肯定形式を取っても、否定的概念が内に潜む」場合があるとし、次のように説明している。

「ついに耐え抜いた」は「くじけなかった／参らなかった」の否定意識と表裏をなしている。同様に「ついに時間切れ引き分け」も「勝負がつかなかった」という否定意識の裏返して、制限時間いっぱいをかけても、ある事態が成立しなかったという不成立の完了を表している。 (p.718)

「とうとう」についても同じ説明が可能であろう。

ところで、3.1.と3.2.については「やっと」・「ようやく」と共通する。この非実現は、「ついに」・「とうとう」に現れて、「やっと」・「ようやく」には見られないものである。それについて、日本語教育誤用例研究会(1997)では、「やっと」・「ようやく」は「事柄の実現をとらえ、その実現に至る過程あるいは実現の様子がどうであったかを述べようとするからである」と説明し、これに対して「ついに」・「とうとう」は、「予期した事柄の実現・非実現にかかわらず、結局決定的な事態が成立したという結果に対して用いられる」(pp.29～30)と説明している。

(24)これは内緒(ないしょ)だが、中学生のときに叔父からマルタン・デュ・ガールの『チボ一家の人々』をプレゼントされたものの、とうとう読まずに今日まで来てしまった。読まねば、という義務感に圧倒されてしまったためだ。 (2003.6.22朝刊)

(25)ある雨の降る日余はこの玄関に上って時間の来るのを待っていると、黒い桐油を着

て饅頭笠を被った郵便脚夫が門から這入って来た。不思議な事にこの郵便屋が鉄瓶を提げている。…なぜ鉄瓶を提げていたものかその理由は今日までついに聞く機会がない。  
(夏目漱石『満韓ところどころ』)

これらの例では、「本を読むこと」、「理由を知ること」が実現されないのであるが、そのような非実現の事態の成立、あるいは、その結果という側面は薄いように思われる。(24)も、「とうとう読まずだ／読んでいない」とも言えるが、特に(25)では完了表現を伴わないためであろう。たとえば、「ついに—ずじまいだ」という慣用的な表現があるが、このような表現を考えると、「ついに」・「とうとう」は、たとえば、「本を読むこと」、「理由を知ること」というような、ある事態の実現が想定されながらさまざまな過程を経て、最終的にどのような事態で完了したのかを表す、と行うことができる。

## 4. 「ついに」・「とうとう」の相違点

### 4. 1. 文章語的と口頭語的

はじめに、辞書の解説のところで見たとおり、『集英社国語辞典』では「とうとう」について「口頭語」と注記しており、『類義語例解辞典—使い方のわかる—』では、「とうとう」に対して、「ついに」が「やや改まった言い方」と述べていた。さらに、前掲の辞書以外にも、『類語大辞典』の「とうとう」の項には、「『ついに』の、より口語的な言い方」の説明も見られる。

次の例は、同じ小説の中でのある老人の死についての描写であるが、「ついに」と「とうとう」の使い分けが見られるところである。

(26) 猪熊の爺は、濁った目を大きく見開いて、平六が身をかかめながら、無造作につきつけた赤ん坊を、食いつきそうな様子をして、じっと見た。見ているうちに、顔の色が、次第に蠟のごとく青ざめて、しわだらけの眦に、涙が玉になりながら、たまって来る。と思うと、ふるえるくちびるのほわりには、不思議な微笑の波が漂って、今までにない無邪気な表情が、いつか顔じゅうの筋肉を柔らげた。しかも、饒舌な彼が、そうなったまま、口をきかない。一同は、「死」がついに、この老人を捕えた

のを知った。……猪熊の爺は、暗におびえて泣く赤子の声の中に、かすかな苦悶をつづけながら、消えかかる松明の火のように、静かに息をひきとったのである。……  
「爺も、とうとう死んだの。」  
(芥川竜之介『偷盗』)

ここでは、一人の老人の死を言うのに、地の文では「ついに」が、会話内では「とうとう」が使われている。

(27) 結局、約4時間の私の釣果はハヤ3匹。「本命」を釣り上げることは、ついにできずじまいだった。  
(2005.10.2.朝刊)

(28) 塩野が二週間ほど入院してからまたある日矢代のところへ訪ねて来た。「とうとう病因分らずじまいさ。」  
(横光利一『旅愁(下)』)

(27)(28)は、「一ずじまい」という同じ表現について、地の文では「ついに」、会話内では「とうとう」と使い分けられている例である。すべての例をこのような文体面でもとえられるかどうかには問題があり、文章語、口頭語と決定的に言うことはできないが、「ついに」が文章語として、「とうとう」が口頭語として用いられる傾向は見えてとれる。

「ついに」と「とうとう」の使用傾向を、新聞記事と現代小説での使用数で調査してみると、表(1)のような結果が得られた。

(表1)朝日新聞(「聞蔵」2003.1.1.~2005.12.31.)と現代小説(青空文庫・その他現代作品、181作品)中の「ついに」・「とうとう」の使用数

	新聞記事	小説
ついに	3330	1059
とうとう	930	1474

新聞記事では「ついに」が「とうとう」の、3.5倍以上用いられており、小説では、「とうとう」の方が「ついに」より多くなっている。これは、新聞記事のように整えられた文章語を主とする「ついに」が用いられ、会話が多く、くだけた表現もある小説では、「とうとう」が増えてくるものと考えられる<sup>5)</sup>。このような結果からも、「ついに」は、

5) たまたま話す機会を得た産経新聞京都総局の記者、和田隆博氏より、新聞記事では字数の制約があるために、「ついに」と「とうとう」のどちらでもよい場合には、「ついに」を使用する傾向がある、と

より文章語的、「とうとう」は口頭語的という、文体的な傾向がおおむね認められる。

#### 4. 2. 期待性と反期待性<sup>6)</sup>

(29) 27日は、ヤンキースがシンシナティ・レッズと行う最初のオープン戦、つまり松井秀喜が、ついに登場する晴れの日のなのだ。ところが当日、空は朝から雲に覆われ、試合開始45分前の午後零時半、とうとう降り出した。1万の客席を7、8割埋めた観客の一部が通路に移動し始める。(2003.3.10.アエラ)

(30) 何度スイッチを押しても、画面も音も出ない。しばらくすると映るのだが、また出なくなる。そんな調子が1週間ほど続き、「我が家自慢の90年製の大型テレビも、とうとう買い替え時か」と思った。それでも、もう一度だけと修理を頼んだ。・・・設計図を見て部品を交換しながら、黙々と故障箇所を追跡している。でも、なかなか難しいらしい。そして、通うこと4回目で、ついに直ったのだ！うれしい。

(2004.10.24.朝刊)

(29)「ついに」で示されるのは、「松井秀喜のメジャー初登場」という、期待する望ましい事態で、「とうとう」は、「その試合が降雨のために中止になる」という、期待に反する望ましくない事態を示している。(30)「とうとう」はテレビの調子が悪く、期待に反して買い替えの事態に至ったことを表し、「ついに」は、「テレビが直る」という、話し手が期待する事態が成立したこと、「うれしい」という望ましい結果になったことを表している。ここでは、「ついに」は、期待した望ましい事態の実現を表し、「とうとう」は、期待に反する望ましくない結果を表す、という使い分けが見られる。このような、期待した望ましい事態の実現を表すことを「期待性」、期待に反する望ましくない結果に終わることを「反期待性」と呼んでおく<sup>7)</sup>。

の御教示をいただいた。この点を考慮すれば、新聞記事における「ついに」・「とうとう」の使用数の差は幾分かは少なくなるものと思われるが、私の調査結果の大きな差がなくなる、あるいは逆転するということにはならないであろう。

- 6) 国立国語研究所(1985)では、「やっと」や「とうとう」などについて、「期待や反期待の変化の完成の実現とかかわる「やっと」や「とうとう」などもほんらいは完成相にかかわる副詞であるが、継続相にかかると、この意味(ある局面の完成後につぎの局面のなかにあるすがた)が実現する」(p. 123と述べている。
- 7) 金水・工藤・沼田(2000)では、「シテシマウには、典型的には、動作を完全にすませるという意味を表す場合と、表される運動が話し手にとって望ましくない帰結をもたらすといふ評価的な意味を表す場合とがあると言われる。(高橋1969、吉川1973、杉本1991、1992他)」と整理し、また、動詞の意味的性質によって、「一般的には話し手が行う意志的な動作の場合には評価的な意味は薄く、他者の行為や無意志運動の場合には評価的な意味が濃く現れやすいというものである(杉本1991、1992他)」

(31) 「力づくなら誰にも負けねえけれど、昨晚の泥棒みたようなすばっこい奴には敵わねえ、幽霊みたようだ、そこにいたかと思うとスーッと消えてしまっだ、あんな泥棒はつかめえどころがねえでがすから力づくにやいかねえ、それでとうとう取逃がしてしまった」

与八、少々残念らしく見えます。 (中里介山『大菩薩峠 1』)

(31) で、力づくなら負けないはずだったが、得体の知れない昨晚の泥棒を取逃がしたという、望ましくない結果になったことを「とうとう」は表すが、会話主の「とうとう」に託した感情を説明したのが、地の文の「残念らしく」である。

日本語教育誤用例研究会(1997)では、「とうとう」について次のように述べている。

「回避願望を抱きながらも望まない方向に進行する事態を止めることができず、結果的に事態の成立を迎え、あきらめ・無力感・残念さ・不満などの気持ちを抱く様子を表すといった場面で使われやすくなる」(明路節子・福島泰正) (p.34)

(31)の例で、「とうとう」と共起する「一てしまう」は、「話し手にとって望ましくない帰結をもたらすという評価的な意味を表す」と説明される。そのような「一てしまう」類と「とうとう」・「ついに」の相関について調査した結果が表2である。

(表2) 「一てしまった」と「ついに」・「とうとう」の呼応

	小 説	新 聞
ついに+てしまった	48	87
ついに+てしまいました	2	12
ついに+ちやった	0	3
合 計	50/1059	102/3330
とうとう+てしまった	75	101
とうとう+てしまいました	29	19
とうとう+ちやった	9	6
合 計	113/1474	126/930

新聞記事では、「とうとう」と「-てしまう」類が呼応する例が、「ついに」の場合の4倍強となっている。「ついに」と「とうとう」の使用頻度では、「ついに」の方が「とうとう」の3.5倍と、圧倒的に多いにもかかわらず、「-てしまう」類と呼応する例は、実数においても「とうとう」の方が多い。小説の場合でも、同様の傾向である。このデータについては、前述の考察から、「とうとう」が反期待性の事態の実現を表す傾向があるために、「-てしまう」類と共起しやすいことを示すものと説明できるであろう。

(32) ついにハイビジョンになった。 (SONYのCM)

今まで述べた結果から、この「ついに」は「とうとう」と置き換えられないと言える。ハイビジョンになったことは、望ましい好ましい事態として視聴者にアピールしなければならないから、反期待性を含む「とうとう」は避けられなければならないのである。

#### 4. 3. 最終到達性と漸次的な過程性

次の例は、「とうとう」と「ついに」が近接して用いられた例である。

(33) 都会から逃げ出した男が、旅先の古い旅館に住みつく。だんだんと気に入られて、とうとうそこを任せ、ついにひとりで営業することになった——そんな温泉宿を紹介されたのは、青森県に出かけた時だった。 (2003.9.10朝刊)

ここでは、「だんだん」という変化の漸次的な進行性を持つ副詞を伴って、都会をドロップアウトした一人の男が地方の温泉宿の主人となっていくという、長い年月をかけて段階を追って実現に向かっていく過程があり、その途中経過の重要な一段階の実現に「とうとう」が用いられる。それに対して、「ついに」は最終的に到達した結果を示していると言える。

(34) 物件求められ、ついにキレた／見出し

最近、我が家に「求む売り物件」のビラが毎日のように投げ込まれる。築40年で角地にあるため目立つらしい。・・・ある日、とうとう電話までかかってきて、私はキ

れた。(2005.2.9.朝刊)

(34)は、見出しに「ついに」、本文に「とうとう」が用いられているが、本文の「私はキレた」は、見出しと同じ事態を指示しているから、「私はついにキレた」と見なすことができる。そうすると、この例も、(33)と同様に、事態の程度がだんだん高くなる漸次的な過程のなかで、直接電話がかかってきて物件を求められるという、決定的な事態の実現に「とうとう」が用いられ、「ついに」は「キレた」という最終的な結果を強調している。次の例は、「ついに」・「とうとう」が同居する例ではないが、一連の状況の推移のなかで、「ついに」と「とうとう」が前の例と同様に機能している。

(35) ゲットーやベルゲン・ベルゼンの強制収容所で暮らした6年間は、常に死と隣り合わせだった。セリンジャーは飢餓に苦しみながらも、生きることに全神経を集約させた。だがついに、アウシュビッツのガス室送りが決まった。(2005.7.23朝刊)

(36) …幸男さんはしだいに会話することもできなくなった。…病状は悪化の一途をたどり、今年7月にはまぶたの筋肉が、8月には眼球すら動かなくなり、とうとういっさいの感情がくみ取れなくなった。(2004.11.12.週刊朝日)

(37) さおの曲がりからみてかなり大物らしい。仲間の差し出したギャブに2キロを越す大型アオリイカが引き上げられた。大小のイカの魚信がいそがしく続いている。うらやましいほどの好成績だ。とうとうえさのアジを丸のみにハマチまで釣れてきた。  
(2003.11.28.朝刊)

このように、「ついに」は最終到達点に、「とうとう」は漸次的な過程性に重点が置かれると言える。

次の例は、同じ内容について見出しでは「ついに」を、記事では「とうとう」を用いた例である。

(38) 公衆電話が減り、ついに携帯を持つ / 見出し

時代の流れには抗しきれず、私もとうとう携帯電話を買いました。こんなものはアクセサリだと思っていました。ところが、公衆電話が次々と街中から姿を消しつつあるため、それを探するのに四苦八苦したからです。(2005.9.27.夕刊)

(39) TBS 社員「ついに来た」不安の一方、期待も楽天が統合提案／見出し

「ついに、きたか」。新興の IT 企業が、既存の大メディアを再び揺さぶった。…「危ない、って前から言われていたのに」。楽天・三木谷社長の会見が始まった夕刻、TBS 本社で報道番組用の映像編集をしていたスタッフの一人はつぶやいた。30代の報道局員は、朝の報道で「とうとう来たか」と思った。ライブドア騒動以降、社内で「次はうちだな」と話題になっていた。株価高騰にも怪しさを感じていた。(2005.10.14.朝刊)

(38)では、始めはアクセサリだと思って、買う気はなかったが、そのために大変困って、携帯電話を買うことになったという経緯を「とうとう」で述べているが、見出しでは、「ついに」によって、携帯電話を持ったという結果を限定的にクローズアップしているのである。これは、「ついに」と「とうとう」の特徴を、新聞の見出しと記事とで効果的に使い分けた例である。(39)の記事の中の「『ついに、きたか』。」は、見出し相当の独立的な扱いと見られる。業界再編成の渦中にあった TBS 社員は、事態の推移、状況の変化を段階的に追いながら見知っているので、統合提案を、重大なポイントではあるが、過程の一段階として受け止めていることを「とうとう」は表している。それに対して、見出しの「ついに」は、楽天の統合提案を決定的な事態として読者に訴えることに機能している。次の例も、ほぼ同様に説明できる。

(40) 関税逃れ「慣習」にメスフジチク会長ら逮捕、「ついに」食肉業界に衝撃

ついに豚肉の関税逃れにまで捜査の手が及んだ――。

…会長逮捕の知らせを受け、同グループ元社員は「今度は豚肉ですか」と肩を落とした。豚肉が売上高の大半を占めていただけに、グループの食肉事業は完全に行き詰まった格好。グループ内では、輸入豚肉の関税逃れは周知の事実だったといい、「とうとう捜査当局のメスが入ったか」とあきらめる声が少なくない。フジチクグループの元幹部は、台湾の貿易会社を使った関税法違反について「薄々知っていた」と認める一方、「業界ではそれが常識。誰がババを引くかということ」と平静を装う。(2005.5.13.朝刊)

(40)では、「ついに来た」という述語動詞を伴った文であったが、(39)では、「ついに」と、副詞だけが記されている。「ついに一た」は最終結果の事態を表そうとするが、「ついに」はそのような対象的な意味を表し得ない。すなわち、ここでは

「ついに」が含む、最終的な結果に到達したのだという、機能的意味とインパクトのみが働くのである。副詞「ついに」の機能を最大限に利用する用法とすることができる。2003年1月1日から2005年10月30日までの新聞記事で、見出しに「ついに」が用いられた例は58例ある。その内、見出しに「ついに」、記事本文に「とうとう」の現れる例は4例あった。「とうとう」が見出しに用いられた例は2例だけで、見出し「とうとう」、本文「ついに」の例はない。「ついに」の持つ最終到達性、結果性を利用したための数字であると考えられる。

次は「とうとう」が見出しに用いられている例である。

(4 1) サッカーくじtoto、とうとう1億7796万円 最高当選額更新

日本スポーツ振興センターは24日、23日、24日の試合で行われた第159

回サッカーくじ(toto)の1等当選金が史上最高額となる1億7796万8775円になったと発表した。当選は1本。これまでの最高額は今年3月の第154回totoで、1億3300万2644円だった。totoは指定された3試合の結果を勝ち、負け、引き分けで予想する。1等は全試合の中で、当選金の上限は2億円。

(2005.4.25.朝刊)

サッカーくじの当選額は今後さらに上昇することもあり得るので、漸次的な過程で用いられる「とうとう」でなければならない。もし、当選金の上限である2億円が出たら、「ついに」が現れることになろう。

#### 4. 4. 新しい局面への展開

前章で述べたように、「ついに」は最終到達点に重点が置かれるので、さらにその到達した事態が新しい局面へ展開していく場合がある。たとえば、(3 2)の「…とうとうそこを任せ、ついにひとりで営業することになった——そんな温泉宿を紹介されたのは、青森県に出かけた時だった」の場合、一人の流れてきた男が最終的な到達点である温泉宿の主人となったところへ、筆者がでかけて行くところから新しい局面が展開している。

(4 2) …実際に剪定が必要かどうかはともかく、俺の方のダチュラは2度目の蕾をつけよう  
としない。しないどころか、ついに俺が最も嫌う虫が付き始めた。(2004.7.14.夕刊)

この「虫が付き始める」ということは、それ以前の経過の最終到達点を示す事態であり、また同時に、「—しはじめる」で表されるように、新しい局面でもある。

(43) 秒読み「まだ」「ついに」対イラクで米大統領最後通告、列島は／見出し

「サダム・フセインと彼の息子たちは、48時間以内にイラクを離れなければならない」。18日午前10時、最後通告を突きつけるブッシュ米大統領のテレビ演説が生中継された。とうとう始まったイラク攻撃の秒読み。「まだ止められる」「やむを得ない」。列島の人々はさまざまな思いを抱きながら、超大国のふるまいを見守った。(2003.3.18.夕刊)

(43)の見出しの「まだ」は、記事本文中の「まだ止められる」に対応し、その省略と考えられ、「まだ戦争を回避できるか」という内容を意味している。「ついに」は、記事本文中の「やむを得ない」に対応し、「ついに戦争突入か」ということを端的に表している。アメリカ対イラクの外交交渉の最終到達点である、米大統領の最後通告と交渉決裂は、すなわち、イラク攻撃開始であって、当然、新しい局面でもある。そこから新たな展開が始まる、新しい事態の発生とも言うもののである。(43)の見出しは、副詞の含む、このようなニュアンスを最大限、効果的に利用した例と言える。

この用法は、「とうとう」に見られないものではないが、特に「ついに」の特徴的な用法である。

## 5. まとめ

完了のAspectに関わる副詞「ついに」・「とうとう」は、現在のある事態の実現を表すもので、その事態の成立の速度が小であること、すなわち、事態実現までの所要時間が大であることを表す。「やっと」・「ようやく」も同じグループに属している。

「ついに」・「とうとう」の共通点として、次の3点を挙げることができる。

1. 長い時間を要したり、労力やエネルギーが費やされたり、さまざまな過程を経たりして現在の事態が実現したことを表す。

2. 確実性のある未来における事態の実現を表す。
3. 打消を伴って、あるいは肯定形式の場合でも内容的にある事態が成り立たない、非実現を表す。

このうち、1.と2.は「やっと」・「ようやく」とも共通し、3.は「ついに」・「とうとう」のみに現れる。

「ついに」・「とうとう」の相違点としては、次の4点を指摘しておきたい。

1. 「ついに」は、より文章語的、「とうとう」は口頭語的である。決定的な使い分けとは言えないが、そのような傾向にあることはおおむね認められる。新聞・小説に見る使用数も、この傾向を示している。
2. 「ついに」で示される事態は、期待された望ましい事態であり、「とうとう」によって実現する事態は、期待に反する望ましくない事態である。これも1.と同じく、これに反する例もあり、決定的な差異ではないが、同一文脈のうちでの使い分けなどに、この傾向が見て取れる。
3. 「とうとう」の場合は、ある事態が終結に至る、その経過や過程に重点が置かれ、「ついに」の場合は、最終的な到達に焦点が当てられる。このような点を利用して、新聞では、同じ内容について、見出しでは「ついに」を用いて、最終的な結果をクローズアップし、記事ではその結果に至る経緯を述べて「とうとう」を用いるといった使い分けが見られる。
4. 「ついに」の示す最終到達点や、新たな局面に展開していくことがある。新しい事態の発生とも言える。これは、「ついに」の特徴的な機能である。

## 【参考文献】

- 北原保雄編(2002) 『明鏡国語辞典』、初版、大修館書店。
- 柴田武・山田進編(2002) 『類語大辞典』、講談社。
- 小学館辞典編集部編(2003) 『類語例解辞典—使い方の分かる』、新装版、小学館
- 田忠魁・泉原省二・金相順編(2004) 『類義語使い分け辞典—日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する—』、研究社。
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編(2000) 『岩波国語辞典』、第六版、岩波書店。
- 森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一編(2000) 『集英社国語辞典』、第二版、集英社
- 森田良行(1994) 『基礎日本語辞典』、第六版、角川書店。
- 李建華(2000) 「副詞「ついに」「とうとう」「やっと」「ようやく」の異同について」、『茨城キリスト教大学紀要1、人文科学』34、茨城キリスト教大学。
- 川端善明(1964) 「時の副詞—述語の層についてその一—」、『国語国文』33-11、京都大学
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子(2000) 『時・否定と取り立て』、岩波書店。
- 工藤浩(1985) 「日本語の文の時間表現」、『言語生活』403、筑摩書房。
- 工藤真由美(1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間表現』、ひつじ書房、pp.5~260。
- 国立国語研究所(1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』、国立国語研究所報告82、秀英出版。pp.1~296。
- 日本語教育誤用例研究会(著)佐治圭三(監修)福島泰正(編)(1997) 『日本語の考えた方・実践マニュアル類似表現の使い分けと指導法』、アルク、pp.29~40。
- 仁田義雄(2002) 『副詞的表現の諸相』、くろしお出版、p. 201~258
- 金英児(2006 a) 「時の副詞—「すでに」・「もう」・「もはや」について—」、『日本文化学報』第28輯、韓国日本文化学会
- \_\_\_\_\_ (2006 b) 「時の副詞—「やっと」・「ようやく」の意味・用法—」、『国文論藻』5、京都女子大学大学院。

〈資料〉

・朝日新聞(「聞蔵」)検索(2003年1月1日～2005年12月31日)

また、次の作品は「青空文庫」から引用した。

芥川竜之介『偷盗』、中里介山『大菩薩峠1』、夏目漱石『満韓ところどころ』、  
横光利一『旅愁』

その他、現代小説の中から引用した。

辻仁成(2002.7)『サヨナライツカ』幻冬舎、さだまさし(2003.8)『精霊流し』幻冬舎、  
藤田宜永(2001.5)『愛の領分』文芸春秋



## 要旨

完了の аспек트에副詞的呼応を持ち、事態の終結が現在において見られる時、現在における完了が成立し、完了の速度的小になる関係を示す時の副詞「ついに」・「とうとう」の特質をモーダルの意味を含めて考察した。その結果、長い時間を要したり、労力やエネルギーが費やされたり、さまざまな過程を経たりして現在の事態が実現したことを表す。確実性のある未来における事態の実現を表す。打消を伴って、あるいは肯定形式の場合でも内容的にある事態が成立しない、非実現を表す。相違点としては、「ついに」はより文章語的、「とうとう」は口頭語的である文体的な傾向がある。また「ついに」によって実現する事態は期待された望ましい事態であり、「とうとう」によって示される事態は期待に反する望ましくない事態である。「とうとう」はある事態が終結に至るその経過・過程に重点が置かれ、「ついに」は最終的な結果に焦点が当てられる。さらに「ついに」の示す最終到達点が新たな局面に展開していくことがある。新しい事態の発生とも言え、これは「ついに」に特徴的な機能である。

キーワード：時の副詞 「ついに」 「とうとう」 完了のAspect 現在の事態の実現  
副詞のモーダルの意味

투 고 : 2006. 5. 31  
1차 심사 : 2006. 6. 10  
2차 심사 : 2006. 7. 1

住 所 : (606-8316) 京都府京都市左京区吉田二本松町14白井アパート北8 号室  
電 話 : 090-3717-2502  
e-mail : larecan@hotmail.com / larecancile@hanmail.net